

近世伏見の観望記録からみる宇宙観の交差*

玉澤春史¹, 早川尚志², 岩橋清美³

Records of observation in Fushimi in Early Modern Period and Transition of Astronomy in Japan

TAMAZAWA Harufumi¹, HAYAKAWA Hisashi², IWAHASHI Kiyomi³

概要

1770年9月17日, 日本全国で低緯度オーロラが観測された. 京都の伏見にある伏見稲荷社(現伏見稲荷大社)の御殿預を務めた東羽倉家の日記にもこの日のオーロラの様子が克明に記されており, 「赤気」「白気」といった表現が使われている. そこには天変地異に対する近世人の「恐れ」「畏怖」といった伝統的宇宙観を反映した意識を読み取ることができる.

同じく伏見の地で1793年8月26日に日本初の天体観望会が開かれ, 主催者である橘南谿もとに多くの知識人が集まった. 当時, 夜空に対する科学的な理解や関心が高まりつつあったと同時に, 天体観測に「楽しみ」を求めている人々の様子が見て取れる.

二つの観望の記録はいずれも当時の知識人層による記録であり, その当時の夜空に対する認識が伺える. 伏見の地で行われたことは偶然ではなく, 当該地域がヒトやモノの往来の拠点であり, 人的ネットワークが重層的に形成されたことによる. 1770年の事例では, 夜空を伝統的観点に結び付けているのに対し, 1793年のそれでは望遠鏡という科学機器を使った学問的関心と娯楽の共存が看取でき, この間の20年間には, 非常に大きな意識の差がある. この2つの事象の背景には, 科学的理解の進展を含む様々な要因が考えられる.

キーワード: 天文学史, 知識人ネットワーク, 近世期の伏見, 岩橋善兵衛, 橘南谿, 荷田信郷

1. 背景: 異分野連携研究「Aurora 4D Project」

本発表の基盤となっているのは, 極地研究所, 国文学研究資料館, 京都大学などの研究者が参加する異分野融合の研究プロジェクト, 通称「オーロラ4Dプロジェクト」である.

「夜空を見て宇宙に思いを馳せるのは科学者だけではない」と題した研究計画では以下のようなことをうたっている. 「人類は古くからオーロラ等の天の異変を観察して記録に残し, 現代では多くの人がデジカメで撮影したオーロラ写真をSNSに掲載している. 本研究の目的は, 第一に人々が残したこれらの資産を自然科学に活かすことであり, さらにそれを通して市民参加型の科学研究のあり方について実践的に考察することである.」

Aurora 4D project, あるいはその基盤となった京都大学グループの研究においても, 単純に過去の記録を科学に使うだけの思想にはとどまっていない. 過去も現在も, 普段見られないような天変現象が見られた時には様々な記録が作成

* 本原稿は現在投稿中の論文をもとに作成した概要である. 詳細は論文を参考されたい.

所 属: 1. 京都大学大学院理学研究科附属天文台

2. 京都大学大学院文学研究科

3. 国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター

連絡先: tamazawa@kwasan.kyoto-u.ac.jp

される。この様々な記録から科学に有用なデータを抽出していくことが目的であるが、さらに、こういった天変現象記録を読み解くことにより、様々な人々の空に対する意識がどのようなものであったかを考察することも含んでいる。

本稿はこうした人々の空への意識に関する考察の一環として、伏見で観測された二つの記録を取り上げる。1770 年のオーロラの観望の記録、さらに 1793 年の天体観望会の記録から、その当時の空に対する意識が、地理的、文化的背景とどのようにつながっていたのかを考察する。

2. 東西交易路の結節点としての伏見

ここでは、近世伏見地域の歴史的変遷と地域的特質を概観し、後段の前提としたい。

伏見の起源は古く、既に日本書紀の 473 年の条 にその「俯見村」の名が見られる。

伏見が今日の姿をとるようになるのは豊臣秀吉が日本統一を果たし(1590)、この地を開発して以来のことである。甥の豊臣秀次に關白の位を譲った秀吉は観月の名所として知られたこの地に隠居屋敷を築いた(1592)。1593 年には拾丸の誕生に伴い大坂城を譲るであろうことなどから、秀吉は伏見城築城に着手し、既存の集落や寺社を移転させて城下町を築いた。

この際特筆すべきは秀吉が伏見城築城に際し、周辺の交易路の整備に努めたことである。彼は淀川南岸に文禄堤を築かせてその上に京街道を通し、伏見～大坂京橋間を結んだ。次いで南の巨椋池に槇島堤を築いてそれまで同池に注いでいた宇治川を分離北上させ、その後、小倉堤を築き、巨椋池を分断して豊後橋を架橋し、大和街道を通して奈良(大和)方面との交通を確保した。

豊臣氏滅亡後、1619 年、伏見は徳川幕府の直轄地となった。徳川幕府は、既存の京街道と天津道を結ぶ形で、東海道を大坂へと延伸し、大坂の京橋に到るまで伏見、淀、枚方、守口の四つの宿(しゆく)を設置した。(延伸された東海道を京都経由にならなかったのは徳川幕府が西国大名と京都の朝廷の接触を恐れたから、という説もある)

1623 年に伏見城が廃城になると、大名や町人は相次いで大坂へ移住し、伏見は往時の繁栄を陰らせたが、なおも中書島～京橋周辺は京都から続く高瀬川と大坂へと続く宇治川の合流する水運上の要衝として価値を失わず、東海道の宿場として、本陣4軒、脇本陣2軒、旅籠屋 29 軒が存在したのみならず、宇治川経由で大坂に向かう高瀬舟や宇治に向かう柴船など起点となった。

このように、伏見は徳川政権下で再び水陸の要衝として栄え、陸上では問屋場と馬借が置かれて公私の物流を支えた。京橋南詰めには船番所と過所船番所が置かれ、一般船と幕府公認の過所船を検閲し、近傍には問屋や回船問屋が立ち並んだ。1637 年に馬借前に開業した笠置屋という酒屋は、今日の月桂冠の前身である。

伏見は 263 町の町からなり、これらの町々は南組 105 町、北組 158 町に大別され、さらにそれらが 9 組に分けられていた。町々は 1666 年から、ほぼ近世を通じて伏見奉行が支配し、総年寄・組頭・惣代といった有力町人によって町の運営がなされた。人口は 1690 年代で 25249 人、1714 年で 30655 人、1830 年代で 40980 人となっており、増加を続けた。町の生業は米屋が 99 軒と最も多いが、質屋が 81 軒、両替屋が 51 軒で、このほかにも多様な職種の商工業が集まっていた。特産品には伏見人形・寒天・煙火(花火)・酒・羊羹などがあり、全国からやってくる旅行者の人気を博していた。また、同地に鎮座する伏見稻荷社は地域の人々のみならず、稻荷の勧請や講を通して武家から庶民に至るまで幅広く信仰され、伏見地区を代表する名所となっていた。

こうした町場としての発展が地域の自治を促進し、後述するような知識人層による文化サークルの基盤となっていくのである。

3. 1770 年の赤気の観測と伏見稻荷社の文化ネットワーク

江戸時代における赤気の発生は、大崎正次氏の研究によれば 25 回を確認することができる。このなかでも 1770 年の赤気については、各地に観測記録が残されており、かなり大規模な現象であったと考えられる。陸奥から長崎にいた

る各地で観測されており、日本海・太平洋沿岸に限らず、信濃・甲斐・山城といった内陸部にも記録が残っている。

極光を表現する言葉は、必ずしも「赤気」・「白気」という言葉が使われているわけではなく「赤い」というような単純記述もある。後述するように国学者羽倉信郷は「赤気」・「白気」を使っているが、これは漢詩や和歌の教養に基づく。百姓の場合、異常な状況を「赤く」と書いているのは、「赤気」・「白気」という言葉を知らなかった可能性もあり、表現の差異は認識の差異をあらわしているとも言える。さらに赤気に対する認識であるが、概ね「凶兆」であるが、唯一の例外が建部綾足の紀行文「折々草」(おりおりくさ)のなかに「豊作の兆し」と喜ぶ年老いた百姓(農民)のことが書かれている。

様々な記録から類推すると、社会安定してきた 18 世紀には、民衆の間では「彗星」を「豊作の予兆」と考えることがあり、こうした感覚と共通していた可能性がある。精査は必要であるが、民衆の間で生じた新たなフォークロアとして理解できるかもしれない。また、寝込んでいたため「赤気」を見逃した者が、翌朝、そのことを聞いて「見ておけばよかった」と後悔したというエピソードもある(『想山著聞奇集』)。つまり、民衆世界にあつては、まず、天変地異という意識があり、祈祷や御神楽をあげて何とか、その場をおさめようとする一方、千載一遇の「珍事」という意識もあつたのである。1770 年の赤気に関わる全国の記録と意識の詳細な検討については、今後の課題としたい。

II 伏見稲荷社社家荷田信郷が見た極光

次に伏見稲荷社社家羽倉信郷(はくらのぶさと)の日記「家記」の記述をみてみよう。

記録によれば、赤気は 28 日午後7時頃、北方の空に現れ、午後 10 時をまわる頃には空全体を覆い、その勢いは銀河を覆い尽くす程で、突然、白い筋のようなものがいくつも発生した。当初は若狭(現福井地域)方面の火災との噂もあったが、そのただならぬ状況に、信郷は一時(2時間ごと)にごとに変化を記しはじめた。午前0時には赤気はピークを迎え、赤気は明るくなったり暗くなったりしながら西方・東方へと拡大し、その状況は午前2時頃まで続いたという。日記中に見られる、「午前0時頃から赤気が明るくなったり暗くなったりする」という描写や、「赤気の中に星が透けて見える」、「白気が赤気を貫く」といった表現、および、極光が収まったあとの午前2時以降の「空が青くなって星が見えてくる」という情景描写は、漢詩的であり、極光の変化を的確に表している。管見の限りでは、これほど詳細に綴った記録はない。

日記には社家(神職)たちが動揺している様子も記されている。社家たちは話し合いを行ったが、これまでに見たことがない天変であることから、これを「凶兆」と判断した。さらには、このような現象がおきたのは早魃の影響であるとし、幕府の天文方に問い合わせるべきだと述べている。

1770 年は全国的に大早魃だったため、当時、民衆の多くは、極光を早魃が引き起こした天変と理解していた。しかし、その後、雨が降った地域もあり、降雨によって「凶兆」のイメージが薄らいだ感もある。

また、このとき、社家が幕府天文方の判断を仰ごうとした点も興味深い。国立公文書館所蔵の広橋兼胤(ひろはしかねたね・公家)の日記では、陰陽寮に問い合わせた上で、翌日、宮中では「平乱・大風・地震」の予兆として祈祷が行われたとある。

伏見稲荷社は国家鎮護の祈祷を職務としながらも、その対応は、日記を見る限り宮中とは異なる。「凶兆」としながらも、現象を客観的に捉えているとも考えられる。

詳細な分析は今後の課題とするが、信郷の日記によると、翌日になっても人々の間で赤気の噂が広まっており、混乱の様子がうかがえる。

現在、東羽倉家文書には、1660 年から 1917 年まで 440 冊余の日記が残されている。信郷が書いている明和年間に限って、天体関連記事をみると、1770 年の赤気のほかに 1769 年正月2日条に彗星の記述がある。これによれば、前年の 1768 年 12 月 20 日頃より彗星が度々現れているとあり、巷の噂にもものぼっているとある。信郷自身も頻繁に彗星が出ることを「凶兆」と考えている。わずかな記述ではあるが、天体現象を意識している状況が看取できる。興味深いのは、それが学問的な興味というよりは、巷の噂、あるいは「凶兆」ではないかという自身の不安から記述されている点で、天文への関心の高まりには、様々な要因があることがうかがえる。

次に信郷が漢詩的な表現を用いて極光の表現を記述しえた文化的背景について述べてみたい。

Ⅲ 伏見稲荷社をめぐる文化ネットワーク

信郷の観測記録の最大の特質は、時刻毎に変わる極光の姿を的確に捉えた記述と「白気一筋銀河ヲ貫キ」といった漢詩的な表現にある。では、そうした記述を可能にした信郷の教養の背景にはどのような人的ネットワークが存在したのだろうか。彼のネットワークは大きく分けて二つあり、一つが漢詩、もう一つが和歌・国学(和学)である。漢詩グループには3つあり、第一に京都を中心とする幽蘭社(ゆうらんしゃ)(主宰:龍草廬)・時習塾(じしゅうじゅく)(主宰:大江玄圃)・賜杖堂詩社(しじょうどうししゃ)(主宰:江村北海)・琴詩堂(きんしどう)(主宰:余易)等がある。第二に伏見稲荷周辺の学僧、第三に大坂の詩社混沌社(こんとんしゃ)とその周辺の医者と文人があげられる。

和歌・国学の分野では小沢蘆庵、上田秋成、伴高蹊、橋本経亮(梅宮神社禰宜)等と交流があった。信郷と秋成を結びつけたのは荷田信美(西羽倉家別家京羽倉家出身)とその友人橋本経亮である。信美は和歌と通じて秋成と知り合い、その縁で蘆庵・高蹊とも懇意になった。秋成は『雨月物語』で知られる小説家だが、もともとは賀茂真淵門下の国学者であり、歌人でもある。賀茂真淵は荷田在満(かだのありまろ)との縁で徳川家御三卿の一つである田安家に仕えて国学を講じているが、彼を田安家に紹介した在満は荷田春満の養子にあたる。つまり、信郷の文化ネットワークの基盤には彼の大叔父である荷田春満(かたのあずまろ)の影響があるのである。信郷のもとに集まる人々は、皆、何らかの形で春満に関係し、彼の学問に心酔していた。そこには、春満が八代将軍吉宗の「学問御用」を勤めたという経緯があり、このことが伏見稲荷社の社家をはじめ、京都の学者たちに少なからぬ影響を与えていたからである。信郷自身は、こうしたネットワークを利用して春満の学問の顕彰と伏見稲荷社の発展を目論んでいた。

信郷の極光観測記録の記述の質には、こうした春満の学問を基盤とする京都の漢詩・和歌ネットワークに基づく教養があったのである。

4. 1793 年 8 月 26 日の観望会と伏見の文化ネットワーク

日本全国でオーロラが見られた記録から 23 年後の 1793 年 8 月 26 日に、京都の伏見で天体観望会(大勢で星を肉眼や望遠鏡をみて楽しむ会)が行われた。

『望遠鏡観諸曜記』には観望会に参加した面々の名が記されている。このうち橘南谿、竹内玄秀(洋法医)、柚木太淳(眼科医)の 3 名は医者であり、外国の知識を、医学技術を通じて目の当たりにしていたと思われる。日本初の医学的解剖としては杉田玄白が知られているが、玄白本人が執刀したのではなく、解剖を横から見て観察していたのである、一方、南谿は自ら執刀して解剖図を残すなど、実証的な部分が見て取れる。

参加者のなかには、医学のネットワーク以外にも、漢学や国学のネットワークも存在する。例えば、並河誠輔は並河誠所(地理学者、「五畿内志」)の親戚筋と推測されるが、並河家は伏見の東羽倉家と親戚である。

つまり、観望会の参加メンバーは、当時の知的階層のなかでも、漢籍や古典といった東洋の伝統的な知識と、天文学や医学といった西欧の近代的な知識と、両方に通じたメンバーが集まっていたのである。漢籍や和歌のネットワークは 1770 年当時、荷田春満の子孫たちを中心に形成されていたが、それに加えて西洋知識を享受した人々のネットワークも形成され、伏見には様々な文化ネットワークが相互に影響し合いながら広がっていたのである。

西欧の場合、ルネサンス以降、近世の天文学者たちは、ガリレオやケプラーに代表されるように、惑星の運動のみならず、天体の物理的特性、光の性質や光学機器にも関心を持って研究したことはよく知られている。一方、我が国の天文方は、暦局における地位の凋落にもかかわらず、その本務が太陰太陽暦の頒布と改良と心得てそれらに直接関係のない天文学には興味を持つことはなく、暦業務以外のことに進出することも幕府役人としては難しかった。

さらにいえば、天文方には暦を計算するための十分な能力が備わっていたとは言えず、1795 年に幕府は高橋至時と間重富を江戸へ招聘し、高橋と間は改暦事業に取り組むこととなる。高橋は大坂定番同心として幕府に仕えていたが、

武士としてはそれほど高い役職とは言えない。一方、間は十一屋という大坂ではよく知られた質屋の主人であった。間と高橋は、ともに豊後杵築藩医であった麻田剛立に師事し、武士と町人という身分を越えて学問によってつながっていた。二人はともに、当時の知識人層であるが、間のような町人の知識が幕府に影響を与えるだけの水準を有していたことは注目すべきことである。結果として、麻田を源流とする在野の研究ネットワークは、1798年の寛政歴の完成に貢献することになる。この麻田派ネットワークと関わりがあったのが橋南谿や岩橋善兵衛である。善兵衛の望遠鏡は寛政の改暦にあたった高橋至時ら幕府天文方にも用いられた。

望遠鏡は民間にも流布していったが、幕府で使用された暦のための観測機器としてではなく、主に「遠眼鏡」、つまり遠方をみるということで、景色を眺めるといった使い方で使用されることが専らであった。副田（2013）によれば当時の浮世絵師などがその構図を利用したものが作品のなかにある。当時の日本では望遠鏡と宇宙をつなげて考えるのはそれほど自然ではなく、科学的素養が必要であった。善兵衛の作成した望遠鏡も、円山応挙などが使用している。

南谿と善兵衛の天文に関する科学的知識は、望遠鏡を自作し観測に用いるほどのものであった。望遠鏡にはレンズを使用する光学望遠鏡と鏡を使う反射望遠鏡があり、岩橋善兵衛が作成したのは光学望遠鏡である。善兵衛は眼鏡職人として生計を立てながらオランダからの渡来品の研究を重ね、時計を考案している。窮理学(物理学)を極めるために京都で皆川淇園(きえん)や橋南谿に入門し、南谿や淇園に紹介された知識人と交流し、自然科学の知識を習得したうえで望遠鏡の製作をするようになる。

『望遠鏡観諸曜記』では観望会の様子は最後に記されており、その前には望遠鏡で観測した太陽、月、木星、土星などの様子が記されている。

月を観る。その色新出の炉銀のごとし。泡沫の如きものありて大小一つならず。数十あいより、肉眼で見るところ、月中の暗黒処(所)鏡を用いてこれを観る。又微に(わずかに)暗色、その象、則ち俗に謂う所の雪輪紋に似るもの三つ、又蚕豆の如きもの二つあり。極めて鮮明、而して光芒四つ出づ。その他かの泡沫の如きもの多少点綴、その魄は則ち肉眼に見るところと異なるところなし。

暦に関する天文学的知識・興味が主流だった当時の天文方に比べて、個々の天体の表面情報に注目するなど、南谿や善兵衛は近代的な天文的興味からの記録を行っている。南谿自身も日本各地で天体の運行に関する観測を行っており、あくまで天文学を理解したうえでの興味の違いと考えられる。当時の天文学ネットワークの始祖である麻田剛立自身は太陽の黒点観測や暦の計算など行っていたが、高橋至時と間重富が暦学に関わっていたのとは対照的に、岩橋善兵衛や橋南谿が天体観望会を行っている。天文学史的な観点で言えば、高橋や間など幕府の天文方が改暦など古来からの位置天文学的興味に向かっていたのに比べ、南谿や善兵衛は近代的な天体物理学的興味に向かっていたともいえる。どちらも西洋の天文学を学んだとはいえ進んでいった方向が分かれたのは興味深い。

位置天文学的興味から天体物理学的興味にも対象を広げた南谿や善兵衛が、楽しみとしての天体観測、観望に至るのはそこまで不自然なことではない。

橋南谿『北窓瑣談』では、以下のように夜空を見ながら楽しむ様子が描かれている。

『人々星見るとで打集り、クワタラントなどもてはやしぬるに、はては夜更て、屋の上にのぼりつつ、其の星は此分野などとののしりあいぬれば、近きあたりの人や怪しうも思ひ、何事ぞと咎めんも恐れあればとて、制して下しぬ。』

天体望遠鏡を天体望遠鏡として使うのは当時の日本としては非常に稀な使い方であったのは明白であるが、科学的興味から娯楽の対象としての夜空という、南谿らはさらに踏み込んだとらえ方をしている。

伏見で行われた日本初の観望会は当時の教養人が酔狂で行ったというよりは、当時の最新の知見の集積場としての伏見で、古来からの知識と舶来の最新の知識と両方学んだうえでの行為だったといえる。そこには従来の漢籍・和歌のネットワークだけでなく、西洋知識のネットワークも加わり、多様な知識人が交流をした結果である。

5. 伏見の知識ネットワークと二つの観望記録をつなぐもの

以上、雑駁ではあるが、18世紀末の伏見地域における天文観測記録を二点紹介し、その天文意識を考察した。

まず、最初に伏見稲荷社御殿預羽倉信郷の1770年の極光観測記録を取り上げた。彼は約2時間毎に夜空の変化を記しており、その漢詩的な表現が極光の状況を詳細に伝えている。彼がこうした記録を残した背景には、伏見稲荷が地域の文化的拠点であり、漢詩・和歌・国学を中心とした多くの文人が集う場所であったことがある。信郷は大叔父に国学者荷田春満を持ち、彼の学問の継承と検証のために上田秋成や伴蒿蹊らとの関係を持った。文化人との交流を通して培われた教養が記述に反映しているのである。1770年の極光観測記述の詳細な検討については、別稿を準備しているが、極光の表現は「赤気」・「白気」だけではなく「赤い」・「白い」・「赤雲」・「水気」といった多様な表現があり、この多様性こそが認識の差異である。信郷の2時間毎に記録をつけていた背景には、当時、知識人層に浸透しつつあった考証主義的手法の影響も看取できる。

しかし、彼が極光を記録した理由はそれだけではない。そこには、まず、「赤気」が前代未聞の天変地異だったことがある。そして、前年から伏見地域では彗星の目撃談が話題になっており、不思議な現象に対する興味が高まっていたという社会的な背景がある。天文現象に関する興味は、学問的な関心だけではなく、巷の評判というものも人の意識に影響を与えるのである。

これに、対し寛政5年7月20日に伏見で行われて観望会はまさに近代的学知への傾斜を示す事柄であった。岩橋善兵衛の新製の望遠鏡を用いた黒点などの観測会には、様々な学問的背景を持つ知識人が参集した。一見、趣味的にも見える観望会は、幕府天文方に代表される正確な暦を作成するという近世初期からの目的をこえるものであり、西洋の知識を受容した知識人の学問的関心を反映したイベントだったのである。天文方の役人をはじめとする近世の天文学者は正確な暦の作成するために、観測を続けてきた。しかし、彼らの関心は、天体現象そのものであり、星や太陽の組成に興味があったのである。

この橘南谿の観測はこの観測に参加できなかった知識人にも関心が持たれており伴蒿蹊の随筆「閑田次筆」(国文学研究資料館所蔵)にも写し取られている。ここで興味深いのは、彼は国学者であるため、南谿の漢文を和文に直している点である。さらに彼は、「自身は天文の知識はないが、最近、京都では南蛮品がはやっているため、書き残した」とその動機を綴っている。蒿蹊は南谿の観測図も書写しているが、彼の月眞像は、南谿と比してクレーターの表現が細かく、芸術的でもある。これは望遠鏡で月をみたことがない、蒿蹊の想像力のあらわれであろう。先述のように伴蒿蹊は信郷の和歌の友人であることから考えれば、この二つの観測記録は、伴蒿蹊を通じて、伏見稲荷に集う知識人にも共有されていたことは想像に難くない。天体に関する関心は、学問の専門性と身分を越えて広がっていたのである。

この二つの観測記録に見える共通点は何であろうか。それは、伏見の地域性に裏づけられた文化活動であるという点であろう。交通の結節点として発展した在郷町伏見は、多くの人と物が集まる場であった。18世紀の伏見は、政治・経済・文化・情報の結節点として地域社会が成熟した時期であった。こうした社会の変容が、天文に関する興味を喚起し、学問的に迫及することを可能したのである。地域社会の中で、天体をめぐる意識を考えると、それが社会関係の総体であると位置づけることができるのである。

謝辞

本研究は以下にあげる様々な支援を受けている。

- ・平成 27 年度総合研究大学院大学 学融合推進センター 学融合研究公募事業「オーロラと人間社会の過去・現在・未来」(代表 片岡龍峰)
- ・平成 28 年度科学研究助成費補助金 基盤研究(B)「近世における前期国学のネットワーク形成と文化・社会の展開に関する学際的研究」(代表 根岸茂夫)
- ・文部科学省特別経費プロジェクト「宇宙開発利用を担うグローバル人材育成のための宇宙学拠点の構築」

●文献:

- 『図書寮叢刊 看聞日記』一, 宮内庁書陵部, 2002 年 61 頁
- 京都市編『史料 京都の歴史』第 16 巻伏見区, 平凡社, 1991 年 48 頁
- 月桂冠株式会社社史編纂委員会編(1999)『月桂冠史料集』京都
- 月桂冠株式会社・社史編纂委員会編(1999)『月桂冠三百六十年史』京都
- 伏見町史刊行委員会(1981)『伏見町史』奈良
- 植村善博, 上野裕編(1999)『京都地区物語』東京
- 中村武生(2005)『御土居堀ものがたり』京都
- 大崎正次編『近世日本天文史料』(原書房, 1994 年) pp583~596.
- 渡辺美和編『続近世日本天文史料』暫定版(私家判)(2007 年) pp91~95.
- 明和7年「庚寅日記」(中林家文書, 国文学研究資料館所蔵)
- 明和7年「家記」(東羽倉家文書, 東丸神社所蔵)
- 盛岡市教育委員会編『盛岡藩家老席日記 雑書』(当用書院, 2012 年) pp279
- 明和7年「八槐御記」(はっかいおんき) (国立公文書館所蔵)
- 渡辺美和「明和7年の天文現象」東亜天文学会 1997 年総会(1997 年 10 月)
- 明和6年「家記」(東羽倉家文書, 東丸神社所蔵)
- 『京都府の地名』(平凡社, 1979 年) pp405~409
- 「荷田春満年譜稿・寛文 11 年羽倉信詮日記」(はくらのぶあきら) (國學院大學, 2008 年) pp5
- 一戸渉「荷田信郷の雅交と『間斎漫吟』の出版」(『國學院雑誌』第 107 巻第 11 号, 2007 年) pp381~395
- 岩橋清美「伏見稲荷社における社記・由緒記編纂と名所の創出」(『江戸文学』第 39 号, 2008 年) pp77~88
- 『稲荷大社由緒記集成』(伏見稲荷大社社務所, 1979 年) 解説 pp62~83.
- 『日本随筆大成』第 1 期 4「橘窓自語」(きっそうじご) (吉川弘文館, 1975 年)
- 吉岡孝「享保期和学御用の再検討」(『國學院雑誌』第 107 巻 11 号, 2006 年) pp346~357
- 白石愛「荷田春満『和書真偽考』の再検討」(『國學院雑誌』第 112 巻 1 号, 2011 年) pp50~67
- 副田一穂 (2013)「江戸時代の望遠鏡と拡張された視覚の絵画化」愛知県美術館研究紀要 20 号
- 中村士 (2005)「天文方の光学研究」天文月報, 2005, 98, 315
- 橘南谿 (1829)『北窓瑣談』(国立国会図書館所蔵)
- 橘南谿『望遠鏡観諸曜記』(津市立図書館所蔵)
- 伴蒿蹊『閑田次筆』(国文学研究資料館所蔵)